

## 植民地朝鮮における近代的空間としての劇場と演劇界

李 知映

### 発表要旨：

本論文は、大日本帝国時代の植民地朝鮮における近代的空間としての劇場に注目する。そしてその中でも、とりわけ朝鮮総督府時代の中 1935 年 12 月 10 日に開館される、京城府の府民のための劇場である「府民館」を取り上げ、府民館が当時の劇団の経営、演劇形式とその内容に与えた影響を明らかにすることを第一の目的とする。さらにこの府民館が、統治権力が日本から米軍政に変わっていく中、韓国国立劇場としてその姿を変えていく過程を考察する。以上を通じて、近代的空間としての劇場が当時の演劇界において如何なる役割と影響を果たしていたのかを明らかにする。本論では、次のように 5 章立ての構成をとって研究を進める。

第 1 章「1900 年代～1930 年代の劇場の実態」では、1900 年代から府民館が設立される 1930 年代までの劇場の実態について考察を行う。ここでは「協律社」<sup>ヒョンニョルサ</sup>、「圓覺社」<sup>ウォンガクサ</sup>、「光武臺」<sup>ゴァンムデ</sup>、「朝鮮劇場」<sup>ジョソングクザン</sup>の 4 つの劇場を取り上げる。

第 2 章「『府民館』の誕生」<sup>フミンゴァン</sup>では、府民館設立に至るまでの背景と、建物の設備及び運営方法について調査する。また、府民館周辺の状況も視野に入れるため、同時代に建てられた劇場も合わせて考察を行う。

第 3 章「『府民館』を通じた新たな試み」<sup>フミンゴァン</sup>では、1935 年から 1939 年まで府民館で行われていた演劇活動について、とりわけ「劇藝術研究會」<sup>グダスルヨングヘ</sup>（以下、劇研）、「中央舞臺」<sup>ジュンアナムデ</sup>と「高協」<sup>コヒョプ</sup>という 3 つの劇団を取り上げ、そこで行なわれた新たな試みについて考察を行う。さらに、商業劇の新しい流れとして登場する「楽劇」という演劇ジャンルも取り上げ、府民館との関係についても考察する。

第 4 章「演劇統制政策と『国民演劇』」では、植民地朝鮮における演劇統制政策と、1940 年前半期に行なわれた「国民演劇」に関する考察を行う。

第 5 章「植民地時代の産物の『府民館』から韓国『国立劇場』へ」<sup>フミンゴァン</sup>では、朝鮮における統治権力が日本から米軍政に変わった 1945 年 8 月 15 日から 1948 年 8 月 15 日までの約 3 年間の「米軍政期」における文化政策と時代状況、その中で推進されていく韓国国立劇場の設立の経緯と過程について考察を行う。

以上のような考察を通じて、植民地朝鮮における近代的空間としての劇場の誕生こそが、劇場の境界を行き来しながら、劇団、演劇形式、演劇運動、そして文化政策に、新しい変化を呼び起こしたことは明らかである。特に、1930 年代中盤以降の演劇界においては、府民館での演劇活動を通じて素材の発見、ジャンルの多様化が試みられており、それらがさらに演劇界を豊かにしたことは間違いない。そして府民館は、1940 年以降国策によって制限された作品しか上演できない空間へとその性格を変えるものの、依然

として積極的な演劇活動を展開していた演劇人たちにより、大韓民国政府樹立後の国立劇場の設立が導かれたのである。府民館において行なわれた演劇活動が、韓国演劇に多大な貢献をしたことが明らかになった。